

## [個別論文]

# 20世紀初期メキシコ・トルコ・中国における学校教育の役割

—デューイが見た革命的世界の学校・教育・文化—

早川 操\*

はじめに—デューイが見た革命的世界の印象記

1. メキシコの社会・宗教・学校教育
  - (1) メキシコの社会状況と帝国主義の問題
  - (2) 教育のルネサンス
2. トルコにおける宗教改革と学校教育
  - (1) トルコの悲劇
  - (2) 新しいアングラ
  - (3) 神権政治の世俗化
3. 中国の近代化と民主主義教育
  - (1) 中国の産業化
  - (2) 中国は国家なのか？

結語—デューイが見た20世紀初期革命的世界における教育文化の課題

## はじめに—デューイが見た革命的世界の印象記

ジョン・デューイは、アメリカの哲学者・教育学者として知られているが、彼は理論家としてだけでなく、優れた社会的観察眼をもった民主主義教育の実践家でもあった。1919年に日本における哲学講義を皮切りに、その後中国に2年あまりにわたって滞在した<sup>1)</sup>。1920年代にもデューイの外国訪問は続き、1924年にはトルコ、1926年にはメキシコ、そして1928年にはソビエトを訪問している。これらの国への訪問時の印象についての論文は*New Republic* 誌などに発表され、1929年に『ソビエト・ロシアの印象と革命的世界 (*Impressions of Soviet Russia and the Revolutionary World*)』として出版された<sup>2)</sup>。これら4カ国の印象記は、書かれた時期が1920年代という点では共通性を持つが、それぞれの社会的状況の特徴を観察したうえで書かれているため、内容はそれぞれ異なっている。ソビエト印象記の中心となっているのは、社会主義革命以後10年を経た社会における新たな実験、学校教育、人々の生活についての記述である。ソビエトでの革命的变化とは、まさ

\* 名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授

に社会主義革命のインパクトがもたらした変革や革新に他ならない。そこには、ソビエトでの社会実験に対して期待を示しているデューイを見出すことができる。

ソビエトのような明確な変化を経験したわけではないが、メキシコ、トルコ、中国においても近代化や民主化の影響によって社会が大きく変わろうとしている状況についての、デューイの報告は興味深い<sup>3)</sup>。これらの3カ国の印象記に共通してみられるデューイの立場は、それぞれの国における近代化と西欧化による社会変容についての考察である。これらの国々は、西洋文明との出会いによる近代化がもたらした社会的経済的変化によって、さまざまな民族、宗教、文化、教育の問題などが生じた。メキシコとトルコでは、異なる民族間の交流によって生じてきた文化的宗教的な課題について報告し、中国では西洋文明との出会いによる近代化のもたらした社会的混乱とその解決のための方策について述べている。

デューイによるこれらの国々の印象記には、社会的経済的変化の観察とともに、日常における人々の生活の変化についても注意を向けている。これらの観察や分析の基本となっているのは、デューイが自らの哲学で展開してきたアメリカ民主主義の理想や実践である。伝統や文化は違っていても、それぞれの社会独自の民主主義の理想や実践を展開できるとデューイは考える。民主主義に関するデューイの基本的視点は、人々の生き方の問題あるいは人々のつき合い方をいかに展開するかということに尽きる。ソビエトの印象記についてはすでに別のところで論じたため、本論文では、メキシコ、トルコ、中国における社会的変革の動きとそこに生きる人々の生活に関するデューイの分析に注目し、民主主義の哲学者デューイが新たな変革に直面した社会の課題をどのようにとらえていたのかを検討してみたい。

## 1. メキシコの社会・宗教・学校教育

メキシコという国の特徴について、デューイは政治と宗教をあげている。1926年のメキシコ憲法改正による法的規制は、教会にとって大きな影響を与えた。それらは、宗教団体が法人としての権利を否定されたこと、外国人による宗教機能の行使を認めないことや学校での宗教教育の禁止、宗教団体の所有物を国が所有すること、宗教儀式は教会内で行うこと、牧師が政治に関与することの禁止、初等教育の世俗化などである<sup>4)</sup>。このことから理解できるように、メキシコの法律による教会の規制は徹底している。この動きは、教会によるこれまでの独占的支配やインディオの支配への反動である。それとともに、外国人排斥の傾向もみられる。また、登録しない牧師が宗教儀式をすることも禁じられた。

牧師による反抗の理由は、教会のほうが市民法よりも高い立場にあるとみなしているためであり、政府による規制の考えはそれを抑制するものであった。教会の所有品を国が押さえることも、外国人牧師の活動を禁止したのもそのためである。しかし、民衆は教会による儀式なしではすまされないため、その再開を希望している。メキシコでは民主主義政府の実現には時間が必要なため、メキシコの革命ははまだ終わっていない。この国における政府と教会の争いは複雑であり、外国人嫌いも根深い。このことから言えるのは、この国ではやがて国民国家が生まれるであろうし、カトリック教会は将来においても過去の独占状態より恵まれた状況になるだろうということである<sup>5)</sup>。

## (1) メキシコの社会状況と帝国主義の問題

1926年当時におけるメキシコの社会状況について、デューイはいくつかの特徴を報告している<sup>6)</sup>。ひとつは公衆衛生の改善であり、学校にも健康診断が導入された。また、学校では水泳プールもつくられ、アウトドア・スポーツが盛んになっていると報告している。

メキシコが矛盾に満ちた国であることもデューイを驚かせた<sup>7)</sup>。15年前には、農民は南北戦争前におけるアメリカ黒人と同様の隷属状態にあり、労働運動も抑圧されていた。しかし、今では世界で最も進んだ労働関係の法規が作られていて、メイデーの行進も五万人以上が参加している。また、メキシコでは人命が軽く扱われていて、繁華街で政治家が拳銃で殺害されてもニュースにならないが、鉱山で事故があれば即座に政府に報告される。その理由は、植民地時代の保守主義と現在の自由で急進的な実験主義の併存と混合によるためであろうという見解をデューイは述べている<sup>8)</sup>。

このような傾向はメキシコの宗教についてもみられる。それはスペイン人による征服前の信仰にカトリックの儀式が重ねられたものであり、そこには土着信仰とマリア信仰が同時に平然として存在し、社会主義と雨乞い信仰やマリア信仰が一人の人間のなかに併呑されているのである<sup>9)</sup>。

また、メキシコの陶磁器の制作にも変化がみられる。デューイ自身はメキシコの陶磁器の形・デザイン・彩色にその土地固有の特色を見出しているが、メキシコの富裕層の人々にとってはその伝統が貧しい小作農の生活を連想させるとして、彼らは欧米のアートを好む傾向にある。このような伝統を維持するのは難しくなっているが、政府の教育関係者が土着文化を守るために努力しているのをデューイは評価している<sup>10)</sup>。

さらにデューイは、メキシコにおける顕著な矛盾として、外国嫌いで反米的でありながらそれでいてアメリカを中心とした外国の文物を模倣しようとする傾向が強いと指摘する<sup>11)</sup>。メキシコのアメリカ化は避けられない問題である。アメリカ製自動車の氾濫、学校での英語の普及、アメリカへの移民や留学生の増加などがその具体例である。欧米先進国の工業化された人々の心理と後進国ラテン系の心理がぶつかり合う時には暴発の危険性が潜んでいる。とくに、短期的な自己利益しか考えない人々は、この危険性をさらに悪化させる。このような人々は、アメリカの経済的進出を食い止めようとするメキシコ政府の努力を妨げる。メキシコ社会安定化のための政府の介入によって、自然な経済的進展を望むビジネス界でさえも外交的行動を求めるようになってしまう。また、鉱山や石油に関係するアメリカのビジネスマンはメキシコのポリシェビズムについて政府を非難しているが、アメリカ政府のやり方に比べればまだ穏やかだという意見をデューイは述べている<sup>12)</sup>。

一般的に、帝国主義は意識的に採用された政策だとデューイは考える<sup>13)</sup>。しかし、形成途上にあるアメリカ帝国主義は、メキシコにおいてこの考えを砕いてしまった。後進国における政府やビジネス界は、規約や義務というアングロサクソンの法的考えや自らの国民を保護する義務をうたった国際法のために、帝国主義を招き入れてしまうことになる。その意味では、帝国主義は意図しなかった結果である。帝国主義的な意図を知らない公衆にとっては、外国の地にいる自国民の生命や財産が危機にさらされるような場合には、その保護のために介入や保護を求める。メキシコでは、アメリカ外交政策のモンロー主義が事態をさらに悪化させた。ヨーロッパ諸国が自国民の保護を求めてアメリカにも同様の介入を行うようにアピールするが、アメリカは介入を拒否する。その結果、他国のビジネス上の利益を守るようになってしまった。アメリカは中南米の国々がアメリカに感謝

すべきだと考えるが、それらの国々では国家意識が高まり子供のように扱われることに対して恨みを持つ。アメリカはヨーロッパ諸国よりも強大な力を持ったことに気づいていないため、帝国主義への傾倒に気づいていない。

たいていのアメリカ人は、メキシコにおけるアメリカのビジネス的関心を知らないため、メキシコが経済的にアメリカに依存していることを知らない<sup>14)</sup>。メキシコの資源、農業、鉱山資源や石油などがほとんどすべてアメリカ人に支配されている。メキシコ政府はこれをめぐってアメリカと法的手段でもって闘っているが、ビジネスではアメリカのほうが上であるためメキシコはアメリカに支配されることになる。経済的な搾取の後に、帝国主義がやってくる。アメリカが求めているのはアメリカの権利の保障であり、アメリカ人が迫害されていることを指摘することにより両国の間に対立関係が生じる。その後、国務省がやってきて、アメリカ流の行政モデルを示して、国の運営方法を教える。英米は一致協力してこの慈善的な活動に取り組んでいる。しかし、メキシコにいるアメリカのビジネスマンにとっては、国務省の介入は必要ではなく、自由放任にしておいてもらうことを望む。そのため、アメリカからの移民は自警団を作って銃による自衛をしているといううわさ話まである<sup>15)</sup>。

また、制度に対する英米系とラテン系民族の心理的相違も大きい<sup>16)</sup>。契約や法的な問題を重視する英米の伝統は、メキシコ人を苦しめている。自国民の保護を義務づける国際法についても、利害の対立を招いて平和を乱すおそれがある。アメリカの憲法は大統領が軍隊を統治するため、議会を無視して戦争を支持することを容認する傾向がある。デューイによれば、アメリカの世論はメキシコへの介入に反対しているが、反対だけでは不十分であり、アメリカ人の習慣を変えるような永続的な方法を見つけなければならないと提案する<sup>17)</sup>。メキシコでは、アメリカの経済的条件と政治的伝統が結合して帝国主義が起りやすくなっている。はたしてどれだけの市民がこれを見直すことができるのだろうかとデューイは危惧している。

## (2) 教育のルネサンス

メキシコの大統領カレス氏がかつて学校教師であった。彼は経済的開放と公教育の発展を自らの政治目標にあげていた。メキシコの学校は国立、州立、市立の3種類である。当時は、国立の学校が他の学校よりも急速に増えていた。6年間の小学校教育のうち4年が義務教育であり、10人中4人の子供が公立学校に在籍していた<sup>18)</sup>。私立学校の統計はないが、子供の半分は私立学校で学んでいたと推測されている。予算もかつての4倍に上り、メキシコとその郊外に5つの青空学校が作られ、800人から1000人の子供が学んでいた<sup>19)</sup>。このような学校は土地の気候にも合っており、芸術的で衛生的であった。

中等教育学校はそのころまでには大学に進学するためのものを除いて存在しなかったが、4校が作られた<sup>20)</sup>。国立の師範学校もつくられ、5000人の生徒が在籍していた。国立大学には1万人の学生がいて、学長はアメリカとの学生交流を計画していた。アメリカ人のためのサマースクールはすでに人気を得ていた。

メキシコにおける教育発展の顕著な事例は、地方における先住民のための学校建設である。その「熟慮された体系的な試み」は革命的であり、メキシコだけでなく世界にとっての社会的実験でも

あった<sup>21)</sup>。先住民は人口の80%を占めているが、これまで彼らの教育は無視され蔑まれてきた。ディアス政権のときに先住民のための学校は一枚もつくられなかったが、昨年1000校が開設され、合計2600校が建設された。この政策が10年継続されることによってすべての子どもが学校教育を受け、非識字率の問題は解消される<sup>22)</sup>。

この革命は、これまで経済的に隷属させられ知的に剥奪され政治的に排除されてきた先住民を社会的知的文化的に統合させるだけでなく、政治的統合をも可能にする<sup>23)</sup>。地方では学校が存在しなかったため、その役割は教会が担ってきたが、牧師は教区の住民に対して学校設立に反対させることによって社会的政治的統合を妨げてきた。政府による学校の世俗化の原因はここにもあった。メキシコの前住民は異なる部族にわかれて孤立して生活していたため、外国人は問題を解決するには強力な独裁的な規則が必要だと考えていた。

地方の学校に関して興味深いのは、その精神や目的である。初代の教育副大臣はメキシコの地方学校が世界でも類をみないほどの「社会的な学校 (a socialized school)」だと述べている<sup>24)</sup>。デューイは、この試みが「学校活動と共同体の活動との緊密な統一の精神」を代表するものであるという<sup>25)</sup>。デューイはみずからの好みの考えとして、後発国は学校の伝統や制度によって妨げられることがないため、いったん開始されれば大きなチャンスを持つことができるという見解を披露している。それとともに、新たな教育制度を導入する国では先進的な教育理論や実践でもって開始することができるというみずからの信念が必ずしも明確な根拠をもっているわけではないことも告白している<sup>26)</sup>。メキシコでの学校や師範学校での試みは、デューイにこの考えを思い起こさせた。現実はまだまだお粗末なものであるが、そこには活力や成長の原形がみられる。いたるところに実験精神が見られ、少なくとも一度以上は試してみようという意欲がみられる。大切なのは政策の連続性であり、政権交代とともに教育計画が変更されないことをデューイは期待していた<sup>27)</sup>。

メキシコにおける学校設立にあたっては、建物や教材などに多くの費用はかかっていなかった。地域住民の協力によって、古い教会などの建物を学校として利用した。教室にはレンガ造りの住居を使い、花を植えた庭が付随していた。建物と地域の気候がうまく重なって、カリキュラムもそれにふさわしいシンプルなものになっていた。読み書き、図画、農業教育などがその内容であった。政府の指針として、家庭を中心とした小工業を起こすことをねらいとした。デューイは、学校での音楽やデザインの学習に関心を示した。とくに、先住民のアートや美的伝統を守ることは文明の発展に貢献するとまで述べている<sup>28)</sup>。政府の教育関係者も、土着のアートやクラフトの保存や民族音楽や民話などの収集に関心を示している。

教え方についての基本的考えは、教員はいないよりいたほうがよいというもので、先住民の男女が読み書きを担当していた。彼らは教え始めてから、専門的な訓練を受けた。彼らは3週間にわたって、「文化的ミッション (cultural missions)」という教員養成の集中的訓練を受けていた<sup>29)</sup>。それは理論的なものではないが、体育の指導者、保健衛生担当のソーシャルワーカー、合唱や手工業の教師、教授方法や経営の専門家グループが訓練を担当していた。教授方法の専門家の仕事は、知的な教科と農業や手工業とを合体させることであった。

政府は、これとともに学校に小さな図書館を作り、それを地域の知的経済的娯楽のためのセンターにすることをめざした。夜学も開設され、遠くから若い男女が集い、ろうそくの火のもとで学

習している姿を見て、デューイはその熱心さに感銘を受けた<sup>30)</sup>。

デューイは、メキシコの教育におけるキーワードを「活動の学校 (escuela de action)」と表現している<sup>31)</sup>。かつての学校の卒業者は優れた記憶力を持っているがリーダーシップや独立心に欠けることを彼はしばしば耳にしていたが、そのような一般化には懐疑的であった。その原因は、伝統的な教科が記憶中心で日常生活の経験からかけ離れていたためである。現在では「活動」は教育の指導原理であり、プロジェクト・メソッドが学校教育の基礎として採用されているとデューイは考えた<sup>32)</sup>。メキシコにおける中心的スポットは学校の教育活動であり、そこには活力・エネルギー・犠牲的の献身があふれていたのである。

メキシコでの取組みを振り返り、デューイはアメリカにおける先住民への理解を深める必要性を提唱する<sup>33)</sup>。アメリカにおける先住民の社会統合には時間がかかる。メキシコにおける外国人の法的権利について非難が寄せられているが、メキシコ人の人種の統合に比べれば二次的な問題であるかもしれない。外国の干渉はメキシコに不安定をもたらし、さらに内的分裂を長引かせることになると警告を発している。

## 2. トルコにおける宗教改革と学校教育

### (1) トルコの悲劇

トルコの印象としてデューイが挙げているのは少数民族の悲しい状況である<sup>34)</sup>。それは外国勢力が自らの利益のためにすべての民族を利用したからである。トルコでは、トルコ人、アルメニア人、ギリシャ人すべてが犠牲者である。犠牲者に悲劇をもたらしたのは、ロシアやイギリスなどの強大国である。ブルサの町をデューイたちが歩いていた時に、ギリシャ人やアルメニア人が経営していた店が閉まっているのを見たが、それはギリシャに住んでいたトルコ人との交換で追放されたためである。ギリシャ人によって燃やされたトルコ人の家の廃墟も見た。権力が変わるたびに、ギリシャ人とトルコ人の商人の間で財産や店などを奪い合っていた。そのほかにも、何十万人という人々が残酷な人間交換によって見知らぬ土地に移住させられているのをデューイは指摘している<sup>35)</sup>。

ブルサではユダヤ人を見たが、彼らはライバルのギリシャ人とアルメニア人がいなくなったため、家屋や財産を所有し繁盛していた。ユダヤ人はヨーロッパ、とりわけスペインから追放された時にトルコに移住して以来、何世紀も自由と平安を享受していた。ユダヤ人は、トルコの政治に首を突っ込み、分裂させるような介入をするシオニストの国家を持っていなかったため幸運であった。それに対して、ギリシャ人やアルメニア人のようにキリスト教の外国勢力の保護のもとにあった少数民族は悲劇を被ることになった。多くは家を失い、多くの孤児が発生したが、アルメニア人の悲劇はまだ終わっていない。ギリシャに移動させられたアルメニア人はさらに追放されそうであるが、ギリシャ人を責めることはできない。しかし、外国勢力の保護によってトルコにアルメニア人の避難所を作ることは新たな災難をもたらす。アルメニア人は、第一次世界大戦まではトルコで平穏に暮らしてきたが、大戦中にはトルコの町をロシアの侵略者に明け渡し、15万人の軍隊を作り、100ものトルコの村を焼き払った。デューイがこの状況を書いているのは、キリスト教徒の外国勢力が介入してくると少数民族は翻弄されてしまうことを言いたかったからである<sup>36)</sup>。

外国勢力は、少数民族の民族的野心を利用して自らの利害を追求し、宗教に訴えることによって

悪意あるやり方を隠そうとする<sup>37)</sup>。トルコでは、トルコ人がこの土地に長年住み支配してきた以上、少数民族はそれに従わなければならない。デューイは、もし人々の間に敵意をあおるために使われているエネルギーや資金の50分の一でも平和的な共存のための方法を探すために使われたならば、状況は変わっていたであろうと指摘する。ヨーロッパ諸国は自分たちの保護や援助がいかに悲劇的な贈物であったかを理解したかどうかは不明だが、アメリカは少数民族を破滅させる政策に騙されないようにしなければならないと提案する<sup>38)</sup>。しかし、トルコ人は突如ナショナリズムに政策転換をした。それが好意的にみられるのか、また介入や策略がはびこるのかはわからない。策謀が続く場合は、トルコ人とバルカン人の悲劇は続くことになるだろうとデューイは警告を発している<sup>39)</sup>。

## (2) 新しいアンゴラ

トルコはこれまでの首都を捨てて、新たな首都をつくることになった。コンスタンチノーブルの人々は驚いたに違いない。アナトリア地方を鉄道で通ったデューイは、その地方の景色がアメリカ西部の高原に似ているという印象を述べている<sup>40)</sup>。トルコの首都移動は、ワシントンからワイオミングに首都を移すのに似ている。

アンゴラに行ってから、デューイは新たな印象もった。アンゴラは丘の上にある東洋的な雰囲気をもった都市であり、新たに生まれ変わった国の首都にふさわしいという印象をもった<sup>41)</sup>。その町はアジア的な田舎の村で、ローマ帝国の栄光を含め、歴史的な侵略の痕跡を残していた。アンゴラは人々と品物の交流地点であり、軍事的な安全と外国の策略から逃れるための町である。ここは小アジアの全貌を掌握するのにふさわしい町なのである。

新しい街づくりは冒険と開拓者精神でもって進められていた。コンスタンチノーブルはくたびれていたが、アンゴラはスポーツ競争に挑戦するような新たな活力に満ちている。道路では多くの人が働き、車が行き交っている。鉄道や家が建設され、人口も倍増している。アメリカの企業が政府と交渉して、未来の街づくりに貢献するための契約を結んでいる。この新旧の結合はアメリカのフロンティアでの仕事を思い起こさせるとデューイは感想を述べている<sup>42)</sup>。

この試みが成功するか否かはわからないが、冒険・活力・希望がこの事業には付随している。新しい政府づくりは、アジアにおける農民の可能性を信じた英雄的な冒険である。アジアがヨーロッパ化されるのを見るためにアジアにやってくるのは不思議な感じであるが、トルコは独自のやり方でヨーロッパ化されなければならない。アンゴラでの新旧の融合はそのシンボルであると、デューイはアジアとヨーロッパとの文化統合の可能性に期待を寄せている<sup>43)</sup>。

## (3) 神権政治の世俗化

ヨーロッパでは国家への忠誠と教会への忠誠の葛藤が見られたように、トルコでも国家と宗教の対立問題がある。トルコでは、愛国心が宗教的感情に打ち勝って、最後の神権政治の国が世俗化された共和国になったとデューイは言う<sup>43)</sup>。カリフ制度が廃止されてモスク学校が閉鎖されたことは、欧米諸国にとっては驚きであった。それは、ヨーロッパのモデルに基づいた国民国家への第一歩である。それは後戻りすることのできない革命の第一歩である。

西洋モデルに基づいて中世の帝国を近代の国民国家へと変容する過程は、ゆっくりとであるが着

実に進んでいる<sup>44)</sup>。憲法の承認はその動きの証である。もしサルタンが外国との裏切り行為にかかわらなかったなら、トルコは共和国でなく君主制になっていたであろう。また、カリフが陰謀の中心になっていなかったら、イギリスのように宗教と国家の関係は強くなっていたであろう。この方向性は、第一次大戦後の連合軍による占領期とギリシャの勝利によって決定づけられた。

外国人はカリフ制度がトルコの財産であると噂しているが、トルコ人は負債と感じている<sup>45)</sup>。カリフは、トルコの内政に外国勢力が干渉する機会を招いただけであった。国際的にはモスLEM世界における汎イスラム主義を促進する政治的財産として機能したが、サルタン＝カリフがイスラム教の首長であるのは、イギリス王が国教の長になるような素朴なやり方と同じである。進歩的なトルコ人は、宗教と政治の一致は反動的な政治的影響をもたらすと言っているが、カリフは国の教師＝説教師として反動的な影響力を持っていることは確かである。世俗化された共和国では、人格と知性のみが威信を勝ち取ることができる。政治と宗教の連携によって、宗派的な教師が国中に墮落をもたらしたために外国の介入を許し、占領下では初等教育はキリスト教の教師によって教えられるべきだという提案を受け入れた。デューイは、正確なことはわからないが、外国の陰謀、反動的な知的・道徳的考え、カリフ制が連動していることが読み取れると分析する<sup>46)</sup>。

進歩的なトルコ人によれば、トルコの近代化・西洋化は外国勢力によって抵抗を受け、転覆させられようとしているという<sup>47)</sup>。西洋諸国はトルコが従順であるようにするため、反動的な教師を使ってトルコ人を無知で遅れたままにしておくように支援をしている。賢明なトルコ人は、近代化に成功した国々のように、学校と国家を世俗化させなければならないと考えている。この考えは欧米に滞在していた者や亡命していた者の考え方を代表するものであるが、それはフランスや反教会主義の影響を強く受けている。しかし、農民でさえもカリフを追放し、モスク学校を閉鎖することを承認した。その原因は、彼らの従順さと学校での教育の不毛さによるものである。モスク学校での読み書きは記憶力の訓練にすぎず、同じことを教える教師になる以外に役に立たないとデューイは批判する<sup>48)</sup>。また、外国による占領期に、カリフが侵略の手先となったことも農民の恨みがあった。さらには、長く続いた戦争のため、同質的な民族のみがトルコに残り、遠方の農民にまで影響を与えるような新しい精神が行きわたった。その結果、自由で独立したトルコを望むようになり、近代化されたトルコこそが自由な国だと考えるようになった。

しかし、宗教において狂信的なのはトルコだけではない。ある国立大学の学長によれば、「真のトルコと外国人の想像のなかにあるトルコ」という二つのトルコがあるという<sup>49)</sup>。トルコにおける宗教的迫害や虐殺をもたらしたのは宗教的な狂信主義そのものではなく、人種・宗教・政治が不吉な結びつきをした結果生じたものである。現在の政権はトルコのみならず他の国々に対しても宗教と政治の分離を提唱しており、1200年かけて寛容と自由のルールを確立したことになる。ナショナリズムにも悪い点はあるが、教条主義的な宗教に比べればそれほど恐ろしいものではないというのがデューイの立場である<sup>50)</sup>。

その事例として、トルコにおける外国人学校を取り上げている<sup>51)</sup>。第一に、トルコ人は外国の政治と宗教とが絡み合った状態に疑いを持っている。第二に、トルコ人は教条主義的な宗教的信条の教え込みを禁止し、明らかな宗教的基盤を持つ学校を閉鎖するというルールを自らにも課した。トルコ政府は、世俗的な教育を行うというルールに従わないカトリック・スクールを閉鎖させたこと



に対する抗議についてフランス人に返事をしたが、フランス人は自分たちの学校に対して母国では禁止されている特権を要求した。とはいっても、すべての宗教教育が禁止されているわけではない。トルコの公立学校でも、週に2時間の宗教教育が認められており、外国人学校においても同様の権利が認められている。しかし、トルコ人の政治的独立や統一をないがしろにして、ギリシャ人やアルメニア人を栄枯ひいきした場合には即刻糾弾される。

中近東では、外国人はみずからの意見や見解を持たないことが望ましいとされている<sup>52)</sup>。トルコにおける現在の変化は、博愛的な教育的関心を持っている外国人にとっては災難である。それは進歩への動きを止めるものであり、無知、混乱、陰謀、墮落への逆戻りであり、それによって憎しみや非寛容さが生じてくる。古い過去の記憶がよみがえってくるせいで、中世的なトルコを終わらせようとする動きに対して善意の外国人が共感をよせなくなるのは残念なことであるとデューイは感想を述べている<sup>53)</sup>。

### 3. 中国の近代化と民主主義教育

#### (1) 中国の産業化

中国では、中国人の「勤勉さ (industrious) と工業化 (industrial)」のギャップが大きい<sup>54)</sup>。中国人の勤勉さは有名である。しかし、機械生産の点ではまだ初期段階にとどまっている。中国で荷物の多くは水路の発達もあって、それを利用して運ばれている。

デューイは、上海の町を含め中国の町を6週間にわたって講演旅行をした時の印象を書いている。上海は工場・鉄道・貿易などの中心地であり、工業化へと変化を遂げるために直面する中国の問題を実感した。この時、デューイは中国の15の町を訪問したが、それらを4つのグループに分類している<sup>55)</sup>。

第一は港があり外国人商人がいる町であり、上海が代表的なものである。ここでは二つの文明が出会って、金儲けという一つの目的を生み出している。中国人は株式や経営システムを問題なく採用している。その理由は、産業化の導入によって生じるすべての面に利益が及ぶからである。そのひとつは投機的要素であり、宝物探しの心理である。金儲けをした一握りの人を除いて、多くの人が事業に飽きてしまう。もうひとつは中国の家族システムであり、それは親戚まで世話をする強力な縁故主義である。第三は、中国の企業はもうかっている時に資金を貯蓄しないことである。いまやビジネスの方法も外国資本と競争できるほどに発展した。中国人は、外国資本による経営方法は仲介人にお金をばらまいたり、労働者との接触をしなかったり、そのやり方はうまくいかないと考えている。

第二は、北部の原始的な町であり、500年前と同じ生活をしている。これらの町では、鉄道により製粉工場や卵工場ができた。多くの卵が売れるため、田舎の町が豊かになった。人口100万人の町でも公立学校、新聞、郵便局がなかった。最大の問題は盗賊であり、中国では泥棒は商人と同様に職業である。兵隊と盗賊は交換可能で、農民は兵隊より盗賊を好んでいる。盗賊から農民を守るために兵隊がやってくると聞いて、村人が財産を持って逃げ出すのを見たとき述べている。

中国の産業化には、安定した強い政府が必要である。軍国主義的な州知事は学校を閉鎖して軍隊のために金を注いだ。これは極端な例であるが、産業発展への政治的介入である。あらゆる地域で、

役人が権力を濫用し、鉞山の利益や鉄道をコントロールしている。そこで得た利益を銀行などに投資して軍国主義と資本とがつながった新たな封建主義が生まれてきている。彼らは多くの金を外国の銀行に預けている。駅長もわいろを払ってその職を得て、見返りに送り主から金を取って埋め合わせをしている。産業は成長していて、それが政府を変える。政府が安定することによって産業が成長していく。

第三は、古い中国を代表する豊かな町であり、ぜいたくで洗練されているが無知と貧困が併存する町である。そこでは新しいものを誘致しないため、産業や貿易が起こらない。これらの町には、引退した役人がため込んだお金を持ってやってくる。ギャンブルや麻薬がはびこるが、産業は発展しない。余ったお金で土地を買い占めるため、小規模の土地所有者は減少し、多くの小作農が作られた。これらの南部の町は反動的で墮落している

第四のタイプは、もめん、製粉、絹の工場が並んでいる上海のような工業都市である。ある町は一つの家族が支配し、木綿工場を作り師範学校を作った。中国のモデルタウンであり、道路、バス、専門学校、ろうあ者のケアなどを行っている。町づくりのやり方は古い中国儒教的父権主義の方法である。このやり方は小さな町ではいいが、大規模な町では不可能である。別の町は自由放任の競争と発展を容認している町である。そこにはバランスのとれた発展はないが、活力がある。その市民生活には協働や組織性がない。それは若い中国を代表する個人主義の強い町である。

デューイは、中国の工業都市には共通の問題が一つあるという。それは中国の問題でもある。イギリス・アメリカ・日本と同じように、自由放任政策によって労働問題や階級闘争が発生するが、中国は他の国から学んで調和のとれた発展を生み出すことができるのか<sup>56)</sup>。中国は問題がからまりあった国である。中国が産業革命の方向に向かうのかどうかは、世界にとって重要な問題である。これまでの兆候からすると、その動きは非人間的な方向に向かっており、西洋の産業革命の悪い段階を繰り返すように見える。中国には工場法もなく、政府はそれを指導し強化することができない。子供は絹織物工場で12時間以上も働かされていて、支払われる賃金もわずかである。表面だけを見ると、中国は社会的には無制限の搾取をする国である<sup>57)</sup>。中国は近代生産や流通の制度を導入することに反対している。中国の保守的な姿勢は、世界が産業革命をコントロールできるようになるまで待っているように見える。どのような勢力や要素が考えられるかはここでは明言できない。

## (2) 中国は国家なのか？

スイスのヘルバーンによれば、同質的でコンパクトなスイスと中国を比較することによって、中国はヨーロッパ的な意味では国家ではないという指摘がなされている<sup>58)</sup>。そこで指摘されているのは、中国にはブルジョワ階級がないこと、中国が従属によって生き延びてきたこと、日本の侵略がはじまっているが、中国を飲み込めるかもしれないが消化はできないこと、逆に規模の大ききで日本が飲み込まれて消化されるであろうということなどである。これらの指摘の後、中国に詳しい人物としてデューイを紹介している。

デューイは、これに対してヘルバーンの考えには誤解があることを指摘する<sup>59)</sup>。たしかに、ヘルバーンの言うように、中国はヨーロッパ的な意味での国家ではない。中国は同質的な国家ではなく、多様であり、地域によって言語の違いも大きい。その例として、学生が村を訪問した時に北京のや

り方は自分たちの村のやり方とはちがうため、学生の提案は受け入れられないと言われたことを紹介している<sup>60)</sup>。中国はどこかに向かっている。国家としての方向を間違えば、政治家は捨てられる。山東問題に関しては中国から多くの反発があったが、それは日本寄りの政治家のまがいへのプロテストである。危機の時には、たとえ少数の者であっても影響力は大きい。

中国は国家といえるのか。デューイは、中国は国家になろうとしているが、それがいつなのかははっきりと言えないという<sup>61)</sup>。フランス、イタリア、ドイツなどの国民国家は最近の現象であり、国際主義についても同じである。世界も中国も動いており、中国はヨーロッパとロシアの動きに影響を受けるであろうとデューイは示唆する。

問題点として、デューイは中国に公共精神がないことを指摘している<sup>62)</sup>。中国は家族や地域の関係を重視する。政治家でも、党派的精神が強い。大きな軍隊が財源を食いつくしている。中国は中央集権化と省の権利が強く、その不利益がある。南北の対立と地方の野心と対立がある。このことは中国だけでなく、アメリカやヨーロッパにおいても同様である。アメリカでも南北戦争があり、ヨーロッパでは外国政府の力を借りて内乱を起こそうとしたし、宗派的対立のときには外国からの干渉を歓迎した。今日でも宗教と政治の分離がされていないし、教会が国家に介入する力を持っているなどの問題がある。中国ではこれらの困難な状況は免れている。

アメリカを訪問したイギリス人に言わせると、アメリカは多様であり、ヨーロッパが一つというのと同じ意味でアメリカは一つであるといえるであろう。アメリカは自由で移動が容易であるという意味で一つの帝国を形成している。これらのことからわかるように、西洋においても国家という考えは流動的なものである。したがって、中国の国家的統一についての説明も簡単なものではないとデューイは考えている<sup>63)</sup>。

政治や経済についても、ヨーロッパ的な考えは中国にはあてはまらない。中国にはブルジョワ階級は存在しない。商人階級も、政治にはかかわらなかった。西洋においてさえ、農民はブルジョワ対プロレタリアートというカテゴリーではうまく説明できない。地主も、学者について尊敬される階級である。ヨーロッパではこの階級差は産業革命の産物である。中国での階級については、現在の関心から理解しようとしてはだめであり、2、3世紀前のヨーロッパのカテゴリーで考えてみるとよいとデューイは提案する<sup>64)</sup>。中国を知るためには独自の観点から見ると、それとも古いヨーロッパの歴史から見たほうがいい。中国は変化の途上にあり、古い王朝時代の中国にこだわってはいけな。中国は政治的・経済的には別世界であり、どこに向かうか誰にもわからない。これらが重なっているため、人類の行方を見ようとする者にとっては興味深い知的関心を引き起こす国であるとデューイは指摘する<sup>65)</sup>。

中国は「従属によって生存する (survival by submission)」典型的な国であるといわれる<sup>66)</sup>。ヨーロッパ的な感覚からすれば、日本はいつまでも中国を抑え込むことはできない。デューイも、中国の産業や教育を統制しようとする日本は、中国を飲み込むかもしれないが消化はできないことに同意する<sup>67)</sup>。国土の大きさと中国人の忍耐強さによって日本は逆に飲み込まれるであろう。この指摘は適切であり、中国は過去のすべての侵略者を飲み込んできた。過去の侵略者は、北部の民族であった。大隈重信は中国が征服されなかったのは鉄道がなかったからであるというが、しかし古代と現代の侵略は違う。現代は経済的搾取を行うため、港・鉄道・鉱山・通信手段を支配したものは

中国を従属させることができる。侵略者が賢明であればあるほど、中国は治安維持以外には行政に関与できなくなる。侵略する国は、永久に搾取する国として、自然資源や労働者を自らの国の利益のために利用する。中国の人々は、侵略国の利益のために徴兵され、自国民はクーリーとして利用され、外国人が支配者になる。そのような状況においては、文化的同化（cultural assimilation）がうまくいっているか否かなどは無意味になる<sup>68</sup>。

国内のコミュニケーションや輸送の改善と外からの抑圧が、国を政治的な単位へと発展させる<sup>69</sup>。中国の国民的な感情は、外国の侵略に対する反応である。中国沿岸部での反感が強いのは、産業の発展が進んでいるからではなく、その地域における外国からの攻撃が激しいからである。国家的統一を欠くことを利用して、結果として国民意識が高まることもある。朝鮮がその例である。朝鮮は政治的には国家意識がなく分裂し、外国の言いなりになっていたため、朝鮮は第二のアイランドになってしまった。中国も例外であるとは言えない。中国では国が形成されつつあるが、それを妨害する要因も多い。どの党派も自らの利益のために国家の権利を外国に譲渡しようとしているが、そのことの報告は公にされていない。

デューイは、もう一つの進歩の要素についても指摘している。それは、中国が分裂するとき、アメリカを除いたさまざまな大国がその分け前をとろうとしているという事実である<sup>70</sup>。もし中国が崩壊するようなことが起こったら、一国だけでなく多くの国に分け与えられるべきだと考えられている。第一次大戦によって、他の大国は日本との競争に加われなかったため、今は日本が有利な立場にある。したがって、他の大国の動きは中国の統合にとってはありがたいものである。これまでの中国の外交政策は、大国同士に戦わせる方法をとってきた。現在では、中国に対する外国の援助は日本による侵略への対抗となっている。この流れのなかで、コンソーシアムの形成、日英同盟の破棄、山東問題などは大きな意味をもって来る。未解決の問題は、日本が中国での自由を得るために、他の大国に対してどのような譲歩をするのがまだわからないということである。

中国は、西洋において何世紀もかかった文字・宗教・経済・科学・政治に関する革命を50年間でやろうとしている。このことが実現できるのかどうかを正確に予見するのは難しい。中国の地方には静寂と安定があるが、中国そのものは変化のただ中にある。西洋の理念や技術との接触を積み重ねることによって、教養階層には新しい精神が生まれてきている。このことは他の制度的な変化にもまして重要な変化であり、この新しい精神が成果を生み出し進歩をもたらすには時間がかかる。このような条件については言葉ではうまく表現できないが、これこそが中国に対する尽きることのない興味を生み出すものであるとデューイは中国に関心をもつ理由を説明している<sup>71</sup>。

## 結語—デューイが見た20世紀初期革命的世界における教育文化の課題

デューイは、20世紀初期の世界の国々において生じていたさまざまな社会的変革に遭遇することができた。ソビエト・ロシアにおける近代化との対決は、欧米の資本主義対ソビエト社会主義という形で展開されていた。そこでデューイが見いだしたのは、計画経済の実験だけでなく、人々の協働を通じて形成されつつあった新たなメンタリティ育成への取組みであった。ソビエト・ロシアでは社会主義の実験が実施されて10年後の状況をみずからの目で見て、社会的制度的変革とともに、新たな精神性が育成されているのを確認した。デューイは、社会的な実験の中で人々が自発的に協

力し合って協働的な成果を生み出している状況に民主的な教育文化の可能性を見いだした。そこに、実験主義的な観点から社会改革や教育改革を分析しようとする彼の実験主義的態度を読み取ることができる。

同様の姿勢は、メキシコ、トルコ、中国に関してもみられる。これらの国々ではそれぞれの社会が直面している問題や課題に焦点を当てて分析している。これらの分析に見られるデューイの基本的姿勢は、それぞれの文化や伝統を理解し、現実状況における客観的な観察と分析に基づいて、問題の原因となっている要因を明らかにすることである。社会的問題状況において抑圧や搾取の原因となっているものに対しては正義の怒りをぶつけ、抑圧されている弱者には共感と愛情をもって改善のための方策を提案するという姿勢である。デューイの外国社会・文化・教育に対する立場、すなわち彼の国際文化教育論には、古い社会が新しい文化と出会うことによって生じる課題を新たな社会的実験の機会ととらえて、教育による人々の精神の改造を提案する立場がみられる。その意味では、国際的な状況における教育や文化を論じるときにも、新たな問題状況における知性的探究の役割を重視するデューイの実験主義の立場が反映されているといえよう。

デューイが訪問したこれらの国々が当時直面していた大きな課題の一つは、西洋文化の受容による近代化が引き起こしていた社会問題であった。メキシコでは、近代化の問題はアメリカ資本主義の影響による工業化や自然資源などの搾取の問題として考察されていた。さらに、民族と宗教の問題についても、アメリカの影響を受けた新たな文化的状況のなかで生じてきたコンフリクトとの関係で論じられていた。トルコに関しては、西洋化が進むにつれて生じた民族間の葛藤と悲劇について分析するとともに、宗教教育禁止による学校教育の世俗化がもたらした問題についても言及している。中国については、近代化をめぐる中国国内の混乱と外国からの不当な介入や侵略に対する国家としての対応の遅れを指摘するとともに、中国の文化的伝統にみられる問題点とそこに潜む可能性について述べている。

中国の印象に関しては、デューイ自身が2年以上にわたって滞在したこともあって、40篇以上の論文で中国の社会・政治・文化・教育・人間観にいたるまで詳細にわたって検討されている。とりわけ、当時の中国のおかれた国際的な状況について、アメリカやヨーロッパ、日本との関係で論じた論文が多くあり、中国・アメリカ・日本の国際関係を分析することによって太平洋戦争に突入するにいたったさまざまな要因についても考察している。東アジアをめぐる国際関係に関するデューイの考察において、日本は侵略国として中国における日本の外交政策が厳しく批判されている。その論調は、近代化に成功した日本が、大国ではあるが分裂した状態にある中国に対して行っている弱い者いじめをアメリカ民主主義の立場から糾弾するというものである。

デューイが書いた論文においては、中国と日本に対する彼の立場はきわめて明確である<sup>72)</sup>。中国に対しては、政治的経済的な問題を多く抱えているにもかかわらず、中国の民衆がもつ可能性によって長期的にはさまざまな問題が解決されるであろうという期待と希望を抱いている。それとは対照的に、日本が近代化に成功したことや日本文化の美しさと人々の優しきは評価するが、民主主義やリベラリズムの進展という政治的な側面では天皇制が妨げになっていることや、日本の西洋文化摂取の方法は内からの本格的な変容ではなく表面的な借用であることを批判している。デューイはみずからの論文のなかで、中国・日本・ヨーロッパの大国・アメリカで繰り返される国際関係

をめぐる問題でいくつか不吉な予言をしているが、日本による中国への侵略が始まらないことや日本とアメリカが戦争をしないことを望んでいた。それとともに、日本のリベラリズムが強くなることや保守的な道徳理念と西洋的な科学技術とが分離した二重性の文化を克服することを期待していた。デューイにとって、当時の日本は東アジアにおける政治的安定と経済的発展の行方を決定する鍵を握っていた国であった。しかし、その方向は彼が望んだものとは異なる方向に向かってしまった。そのこともあってか、第二次世界大戦後におけるデューイの日本への言及はほとんどない。彼がその後の日本をどのように見ていたのかがわからないのは残念である。デューイにとって、日本は近代化に成功した国ではあっても、革命的世界の一角とみなさなかつた理由もこのあたりにあるのかもしれない。

国際文化論を含めた彼の社会的文化的探究や分析についても、人間の知性がはたす役割は大きな位置を占めている。デューイは、社会的問題状況においても人間の知性は問題の改善や解決をもたらし、人間の課題や不安を緩和させ解消させてくれると信じていた。それによって新たな課題が生じるにしても、社会実験に積極的に取り組むことで新たな社会的文化的状況が再構築されていくという彼の立場は「文化的実験主義」と呼ぶことができる。さまざまな問題状況の解決において働く人間の知性を彼は「実験的知性」と呼ぶが、社会的文化的問題状況において働く知性は「協働的知性」と呼ばれる社会的知性でもある。この協働的知性はあらゆる状況において万能薬として機能するわけではないが、デューイの晩年における実験主義的教育理論の特徴を理解する場合には重要な中心概念となっている。それを解明するために、さらに1930年代以降における彼自身の社会的探究の成果を検討していくことが必要である。デューイの民主主義哲学の原点は、協働的知性の地平を明らかにすることによってさらに究明されたい。

#### 【註】

- 1) 中国におけるデューイの印象については、拙論「デューイが見た異文化における人間と教育—1920年代初期デューイの中国観」『日本デューイ学会紀要』第48号、2007年10月、75-85頁を参照のこと。
- 2) John Dewey, *Impressions of Soviet Russia and the Revolutionary World* (New York: New Republic, Inc., 1929).
- 3) メキシコ・トルコ・中国に関するデューイの論文内容は以下のようになっている。
  - ・ Mexico (1926): I Church and State in Mexico, II Mexico's Educational Renaissance, III From a Mexican Notebook, IV Imperialism is easy
  - ・ Turkey (1924): I The Turkish Tragedy, II Angora, the New, III Secularizing a Theocracy
  - ・ China (1920): I Industrial China, II Is China a Nation ?
- 4) Dewey, *Impressions of Soviet Russia and the Revolutionary World*, pp. 138-9.
- 5) Dewey, "Church and State in Mexico," p. 149.
- 6) Dewey, "From a Mexican Notebook," p. 168.
- 7) Ibid., p. 171.
- 8) Ibid., p. 173.

- 9) Ibid., pp. 174–5.
- 10) Ibid., p. 177.
- 11) Ibid.
- 12) Ibid., p. 180.
- 13) Dewey, “Imperialism is Easy,” p. 181.
- 14) Ibid., p. 185.
- 15) Ibid., p. 191.
- 16) Ibid., p. 192.
- 17) Ibid., p. 193.
- 18) Dewey, “Mexico’s Educational Renaissance,” p. 151.
- 19) Ibid., pp. 151–2.
- 20) Ibid., p. 152.
- 21) Ibid., p. 154.
- 22) Ibid., p. 155.
- 23) Ibid.
- 24) Ibid., p. 158.
- 25) Ibid.
- 26) Ibid., pp. 158–9.
- 27) Ibid., p. 160.
- 28) Ibid., p. 162.
- 29) Ibid., p. 163.
- 30) Ibid., p. 165.
- 31) Ibid.
- 32) Ibid., p. 166.
- 33) Ibid., p. 167.
- 34) Dewey, “The Turkish Tragedy,” p. 197.
- 35) Ibid., p. 200.
- 36) Ibid., p. 202.
- 37) Ibid., p. 305–6.
- 38) Ibid., p. 207.
- 39) Ibid.
- 40) Dewey, “Angola, the New,” p. 210.
- 41) Ibid., p. 212–3.
- 42) Ibid., p. 217.
- 43) Ibid., p. 219.
- 43) Dewey, “Secularizing a Theocracy,” p. 210.
- 44) Ibid., pp. 222–3.

- 45) Ibid., p. 224.
- 46) Ibid., pp. 226 – 7.
- 47) Ibid., p. 227.
- 48) Ibid., pp. 228 – 9.
- 49) Ibid., p. 230.
- 50) Ibid., p. 231.
- 51) Ibid., pp. 231 – 2.
- 52) Ibid., p. 233.
- 53) Ibid., p. 233 – 4.
- 54) Dewey, “Industrial China,” p. 237.
- 55) Ibid., pp. 238 – 249.
- 56) Ibid., pp. 249 – 250.
- 57) Ibid., p. 251.
- 58) Dewey, “Is China a Nation ?” p. 252.
- 59) Ibid., p. 254.
- 60) Ibid., p. 255.
- 61) Ibid., pp. 256 – 7.
- 62) Ibid., p. 258.
- 63) Ibid., p. 260.
- 64) Ibid., p. 262.
- 65) Ibid., p. 262.
- 66) Ibid., p. 263.
- 67) Ibid., pp. 263 – 4.
- 68) Ibid., p. 265.
- 69) Ibid., pp. 265 – 7.
- 70) Ibid., pp. 267 – 8.
- 71) Ibid., p. 270.
- 72) デューイの日本文化論については、拙論「ジョン・デューイの日本観—実験主義的リベラリズムから見た1920年代初期の日本における民主主義の課題」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』第54号、2008年3月、45–57頁、および「デューイによる日本のデモクラシー批判—1920年代の日中関係から見た日本の政治的文化的課題—」『日本デューイ学会紀要』第50号、75–84頁を参照。



# The Role of School Education in the Revolutionary World during the Early Twentieth Century:

John Dewey's Impressions of School Education in Mexico, Turkey, and China

Misao Hayakawa

The aim of this paper is to clarify the insights of John Dewey on his observations and analyses of the social change and school education in Mexico, Turkey and China during the 1920's with reference to the impact of modernization upon these three countries.

First, Dewey's impression of the Mexican society is explored in relation to his analysis of the influences of American capitalism upon business activities in Mexico. Also, his impressions of the newly-built schools and art education in Mexico are described as an evidence of the changing Mexican society.

Second, the impact of Westernization in Turkey is examined with reference to the racial and religious conflicts among Greeks, Armenians, and Jews and to the subsequent separation of school education and religious teaching.

Third, Dewey's analysis of the industrialization in China is discussed by referring to his description of a widening gap between the peoples' lives in industrialized cities and rural towns. Dewey's suggestion to construct the independent China is also examined in order to prevent the Japanese economic exploitation in China and to protect China from the invasion of foreign powers.

In conclusion, it is proposed that a further examination of Dewey's observations of international education and culture be needed for the construction of the effective theory of cooperative intelligence in education.